

## ダージリンの旅

式 正 英

ネパールとブータンの国境に近く、シッキムの谷をのぞむ位置にあるダージリンは、インドの避暑地であるいわゆるヒル・ステーションの中でもその「女王」と呼ばれている。インドで開催された国際会議の帰途、1968年12月17日ヒマラヤを見るのが念願だったのを理由に、ひとりダージリンに赴いた。最後の峠をこえて突然あらわれたアーバントロートに輝くカンチェンジュンガ山の姿に接して、初めて見るヒマラヤの荘厳さは正しく期待以上のすばらしさであった。ダージリンはヒマラヤの前山にあたる海拔2000mを越す山稜上の都市である。19世紀の初めイギリス人に、その避暑地としての適格さを認められた頃は、まだ人口100人の小村落に過ぎなかったが、今では人口4万人の高所都市として異彩を放っている。

ヒマラヤの景観に加えて、斜面はことごとくダージリン茶の茶畑となっており、ネバリーズ、レプチャ、シェルパ、ブータ、ティベタン、ヒンズーなどその構成人種は甚しく複雑で、宗教は多様、あらゆる教会が雑居して、しかもそれが平和な生活を保っているという点で、まことに興味がつきない所である。

シルグリからダージリンに至る由緒深い登山電車は、この年の10月3日から6日にかけて西ベンガル一帯を見舞った62時間の連続降雨の際、地すべりや崩壊によって軌道が寸断され不通となっていたため、バグドグラ飛行場から乗合タクシーの客となった。その折一緒になったインド美人のミス・ズンネは、エア・インディアのホステスの教育掛りで、たまたま冬休みを故郷に帰る所であった。翌日の早朝から昼の間は、二つのカレッジ（冬休み中であつたが）、タイガーヒル、テンジンの登山学校やヒマラヤ動物園など、訪ねる所が多く、夕方になって多少悪いとは思つたが、街の土産物店を案内してもらおうと思つて、ズンネの家に立寄つた。ズンネの家は街の中心のバザールにあって、階下は商店がいくつもあるが、二階は普通の住宅になっていた。ズンネ自らいうお転婆のスポーツウーマンとあって、応接間は何十という優勝カップで飾られていた。ズンネとその姉と連立って街の商店を案内してくれた。ズンネの顔がきくおかげで、チベットのネックレースなど面白い土産が安心して買えた。何の屈託もなく親切にしてくれるのは、ズンネが国際人のせいなのか、その教養のせいなのか、とも角、愉快的思い出となつた。

屋下り、ダージリンの街路で平板測量をしている測量士に話しかけてみた所、彼はインディアン・サーヴェー（インドの国土地理院にあたる）の職員で1万分1地形図作製に現地点検に来ている所であつ

た。ズンネとわかれてホテルに戻ると、かの測量士バンダハカル氏が待っていてくれた。22才の青年の父親と私が同年だというので一驚もしたが、なかなか弁のたつ面白い青年であった。「日本はトランジスターラジオやカメラを世界に輸出しているが、インドはその哲学を輸出している」などという。彼はお土産に線香と紅茶を一箱くれた。ダーズリンへの独り旅は、全く気持の好いことの連続であった。今でも思い出すごとに、心の和む感じがする。

## エベレスト飛行

正井泰夫

1968年12月11日、カトマンズより飛行機でエベレスト山を見にいく。8848m、この世界最高峰は今、私の目の前にある。チベットの澄みきった青い空に映えて、青黒い南壁をこちらに向けたエベレスト山がそそり立つ。

エベレストを、現地ではサガルマタと呼ぶ。有名なクンプ氷河は、手前のローツェ・ヌブツェなどの高峰の裏にあって見えない。たくさんの8000m前後の高峰に囲まれて、エベレストは青黒くそびえている。

飛行機から見たエベレストは、これがあのように何日も歩かなければならない山とは思えないくらい、むしろ平凡にさえ見える。近代文明は、人々の素朴な感激を押しつぶしてしまうことが多い。今、眼前に展開するエベレストは、近代文明の産物である飛行機から見ているにもかかわらず、恐ろしく強烈な感激をもって追ってくる。

操縦席から見たエベレストの展望と、この偉大なクンプヒマール山脈のパノラマは、恐らく終生忘れることができないだろう。しばらく前まで旅をしていたインド亜大陸の、あの赤茶けた瓦礫の世界とは、この白銀のヒマラヤは何と異なっていることか。ヒマラヤの多くの高峰が、ガネシュヒマールとか、アンナブルナとか、ドルジェとか、ヒンズー教やその他の宗教の神様の名前をもっているものもうなづける。

クンプヒマール一帯の氷河の末端は、所によっては4300m辺まで下っている。しかし、大部分は4600m以上で、5000m以上のものも多い。氷河の下半分は、土砂や礫をたくさんかぶっており、上半分の真白な姿とは大違いである。

クンプ氷河の辺では、海拔5000m辺まで、現住民の集落がある。ロブチェ4930m、ゾンラ4843m、ツォロオグ4665m、ドググラ4620m、チュクン4730mというように、U字谷の谷底に小集落が点在している。アンデスとともに、世界における居住の高距限界なのだ。